

マザーグースの歌 (00・12・16)

来^き住^し正三 (昭23・文甲)

はじめに

昭和二三年文科甲類卒業の来住です。ちょっと変な名前ですので読み方が分からない方も多いと思いますが、これは播磨の国の地名です。播磨風土記に出ている由緒ある名前ですが、恐らく何処かから来た外人ではないかと思われます。私は文学部というよな極めて非生産的な学部に入りまして、卒業後も英文学といった何の役にも立たないようなことをなりわいにしておりまして、まあ一応それで食えました。私が食う役には立ってたわけですが、武田君から話があって、何でもよいからというので、イギリスの伝承童謡を取り上げることにしました。

マザーグースの歌

たまたま今、日本語の乱れということがよく言われておりますが、日本語の場合、昔から伝わっている伝承童謡は幾らかありますがほんの僅かしかない。それに対して英語においては非常にたくさんの伝承童謡が伝わっております。いわゆるマザーグースといわれるものです。これは立派な一冊の本になっておりますし、それから辞書もある。多分全部で千前後あると思いますが、数からいっても、それほどたくさんの伝承童謡が残っています。これはイギリスでは *Nursery Rhymes* つまり子供部屋の歌と言われています。お母さんが子供に歌って聞かせる歌です。

こういう形ですつと歌い継がれてきたものですが、実際このマザーグースという名前そのものは、そんなに古いものではありません。一八世紀、最初に英語でマザーグースといふのが出たのが、一七二九年となっています。これは実はフランスの童話作家シャルル・ペローの *Contes de Ma Mère L'Oye* から来たものです。

これをそのまま英訳したのが *Mother Goose's Tales* という物語です。これがマザーグースという言葉の使い始めて、マザーグースと題の付いた童謡集が出たのはその後ですから、そんなに古いものではありません。ただし歌そのものは非常に古いものと思われてい

ます。例えば、よく歌われる London Bridge is falling down, もとは broken down ですが、あの歌があります。ロンドン・ブリッジが落ちた、橋が落ちる、橋が落ちたら建て直さなければならぬ。建て替えなければならぬ。その時に恐らく日本にも似た話がありますが、人柱を立てたのではないか、そういう悲しいことがあってあの歌はそんな出来事を歌ったものかもしれないというので、ずいぶん古い歌のようです。このように古い歌が、現在まで生きているということです。

今でも新聞とか雑誌とかの見出し、あるいは文章のなかにしばしば登場する、そういう意味で非常に古い言葉が大切にされています。近頃の日本のように、何でもかんでもカタカナで表し、新しがつて喜んでいふというようなことはイギリスではやってないわけです。そこで、ちょっとその実例のようなものを取り上げてみました。まず最初は映画の題名です。二重括弧で書いてあるのは日本で上映された際の邦訳題名です。

マザーグースと映画

「大統領の陰謀」

例えば『大統領の陰謀』という映画がありますが、これは実はここに出ておりますハンブレイ・ダンブレイといふような歌に由来します。「ハンブレイ・ダンブレイがおっこ

『大統領の陰謀』

Humpty Dumpty sat on a wall,
Humpty Dumpty had a great fall ;
All the King's horses and all the King's
men
Couldn't put Humpty together again.

ちて、王様の軍隊が集まっても、王様の兵隊が何人来ても、ハンプティを元に戻すことはできなかった。ハンプティ・ダンプティってなあに。」答は卵です。これはヨーロッパ各地に同じような童謡があるようです。

つまり卵は割れると二度ともに返らないというので、アンダーラインでひいてありますが、*All the King's Men* 例えはこの言葉が出てくると、イギリス人やアメリカ人はああこのことはもう二度と元に戻らないことだ、どうあがいても回復はできないのだという、そういう印象を受けるわけです。かつてアメリカのニクソン大統領が、ウォーターゲート事件で弾劾裁判にかかって、そのときのワシントン・ポストの新聞記者の活躍を描いたのが、この『大統領の陰謀』という映画であって、その原題は実は *All the King's Men* ではありません。 *All the President's Men* つまり大統領の部下たちとなっています。しかしそれを読むと、英米人はすぐにぴんとくるわけです。これは結局いくら大統領の部下があがいても、卵が割れたように、もう二度と元にはもどらないのだという、つまりそういう意味で非常に含蓄のある題名が付いているわけです。 *All the President's*

『風が吹くとき』
『クレイドル・ウイル・ロック』

Hush-a-bye, baby, on the tree top,
When the wind blows the cradle will rock ;
When the bough breaks the cradle will fall,
Down Will come baby, cradle, and all.

Menというところ、このマザーグースが連想され、ニクソンやその部下がいくらががんばっても、もう元に戻れなかったことが示されます。

『風が吹くとき』

『風が吹くとき』という映画は実はアニメーションです。そんな昔ではないのですが、イギリスの漫画作家が描いた核戦争です。核戦争の悲劇を描いたアニメーションなのですが、これの題名が、この歌からとった『風が吹くとき』When the Wind Blows という題名だったわけです。つまり彼らにとってみれば、When the Wind Blows という題名をみると、この子守歌を思い出します。「木のてっぺんにゆりかごがかかっている

て、風が吹いたらゆりかごが揺れて、枝が折れたらゆりかごが落ちこちる。赤ん坊も何もみんな落ちこちちゃう」という、ちょっとふつうの子守歌よりは変わっている歌です。

非常に危うい状態、それを示すときに When the Wind Blows という句が使われます。

人類が何回絶滅しても終わらないくらいの核兵器を備えているという危うい状態、それが

When the Wind Blows という題で映画化されました。これは日本の題名は「風が吹くと
き」そのままだったと思います。

それからこれは比較的最近ですが、『クレイドル・ウィル・ロック』、これも第二次大戦の前ですか、オーソン・ウェルズというアメリカの俳優が、何か *The Cradle Will Rock* という名前のミュージカルを上演するに關して、当時の非常に不景気で戦争の危機の迫った状況のなかで苦闘するさまを描いた作品のようです。これも *The Cradle Will Rock* つまりゆりかごが揺れるというそれだけでは、恐らく我々日本人には何も分らないわけですが、彼らにとってみれば、この子守歌を引いているのだなということがびんとくるわけです。非常に危うい状態であることがすぐわかります。

こういうふうな題名とかほんの短い言葉ですが、それでもって元のマザーグースの歌が連想されて内容を示すようなものがよくあります。それから、なかには全然内容と関係のないものもあります。

「お熱いのが好き」

「お熱いのが好き」はマリリン・モンロー主演の極めて愉快的な楽しい映画ですが、これもこの元歌は全然意味があるようなないような歌で、大体マザーグースにはこんな変な

『お熱いのが好き』

Pease porridge hot,
Pease porridge cold,
Pease porridge in the pot
Nine days old,
Some like it hot,
Some like it cold,
Some like it in the pot
Nine days old.

歌が多いのです。訳をご覧になれば分かると思いますが、
Pease porridge hot これは豆のおかゆです。「熱い豆が
ゆ、冷たい豆がゆ、それからポットに九日間も入れてお
いた豆がゆ、熱いのが好きな人も冷たいのが好き
な人もいる、なかには九日間ポットに入れておいたのが
好きな人もいる。」なんだか馬鹿みたいな歌です。

これは日本では、「せっせっせ、夏も近づく八十
八夜」という手打ち歌なのです。ばんばんばんと手をたたいて子供が遊ぶ歌です。そ
の中で *Some like it hot* これをそのまま『お熱いのが好き』の題名にしています。だか
ら歌の内容と映画とは何の関係もありません。ただ *Some like it hot* とくるとあああの歌
から取ったのだなと彼らは感じるわけです。

『女が愛情にかわくとき』

それから『女が愛情にかわくとき』これも邦画題名です。昔の人は非常にいろいろと邦
画の題名を考えました。 *Waterloo Bridge* に『哀愁』という題名をつけたこともありまし
たし、内容からして、非常にびったりした邦画の題名を考えただけですが、近頃はみんなさ

「女が愛情に渴くとき」

Peter, Peter, pumpkin eater,
Had a wife and couldn't keep her ;
He put her in a pumpkin shell
And there he kept her very well.

Peter, Peter, pumpkin eater,
Had another, and didn't love her ;
Peter learned to read and spell
And then he loved her very well.

ぼっちゃって、なんかみんなカタカナになっています。

これほどカタカナばかりになったら、もう何を見てよいか分からなくなるのではないかと思うのです。「女が愛情にかわくとき」というのは、これは実は原題が *The Pumpkin Eater* 「かぼちゃ食い」、「かぼちゃ好きの人」という奇妙なタイトルです。映画の題名は *The* が付いていますが、かぼちゃ食いといっても何だか分かりません。「かぼちゃ食い」というこの歌にはちよつと意味がありまして、一番は奥さんがいて養いきれず、かぼちゃのなかに入れておいて何とかそこで養った。二番がかぼ

ちゃ食いはまた結婚したがうまく愛せなかつた。そこで一生懸命読み書きを習って、それから何とか非常によく愛するようになった。

これはピーターという男のことを歌ったわけですが、『女が愛情にかわくとき』は主演は女です。三回くらい離婚した女が、三回目の夫の浮気に悩むといったような話です。だからこれは内容に関係があるような言いような、どうもはつきりしません。ともかく *The Pumpkin Eater* というタイトルから、そういう男女間のもつれを描く作品であるという

ことが、題名を見れば何となく分かるわけです。

アガサ・クリステイとマザーグース

「そして誰もいなくなった」

それからここに取り上げた長い歌、これは有名なアガサ・クリステイの作品『そして誰もいなくなった』の元歌です。これはそこに順番に出てきますが、最初は十人の人がいて、一人ずつ死んでいって最後には誰もいなくなってしまうという、そういう推理小説を映画化したものです。ここに Ten little nigger boys と書いてありますが、nigger という言葉、これは実は現在では使ってならない言葉とされています。「黒人」という意味です。実はこれはもとは Ten Little Indians 「インディアンの子供」というアメリカの歌だったのが、イギリスに入って、イギリス人はニガーと言ってもそのころはあまり気にしなかったのでニガーというようになったようです。

アガサ・クリステイの小説では、この歌に出ているのと同じようなかたちで、一人ずつ殺されていきます。最初の犠牲者は首を絞められて死にます。次は寝過ごしてベッドの中で殺されるとか、殆どこの歌と同じように順番に殺されていって、しかも最後にはゼロになってしまふ。もとの歌は結婚して誰もいなくなったというのですが、クリステイの場合

「そして誰もいなくなった」

Ten little nigger boys went out to dine ;
One choked his little self, and then there were nine.

Nine little nigger boys sat up very late ;
One overslept himself, and then there were eight.

Eight little nigger boys travelling in Devon ;
One said he'd stay there, and then there were seven.

Seven little nigger boys chopping up sticks ;
One chopped himself in half, and then there were six.

Six little nigger boys playing with a hive ;
A bumble-bee stung one, and then there were five.

Five little nigger boys going in for law ;
One got in chancery, and then there were four.

Four little nigger boys going out to sea ;
A red herring swallowed one, and then there were three.

Three little nigger boys walking in the Zoo ;
A big bear hugged one, and then there were two.

Two little nigger boy sitting in the sun ;
One got frizzled up, and then there was one.

One little nigger boy living all alone ;
He got married, and then there were none.

はそうではなくて、みんな死んでしまうわけです。一体犯人は誰だということになります。

『愛国殺人』

クリステイという人は非常にマザーグースが好きだったらしくて、しばしば小説に取り入れています。それをいくつか上げて見ました。『愛国殺人』というのは、アメリカで出したときの出版名です。The Patriotic Murders 『愛国殺人』という作品を、イギリスで出したときの題名は、One, Two, Buckle My Shoe で、これは数字を覚える子供の数え歌から来ています。こういう歌で子供は数を覚えるわけです。で、これはイギリスでは『一、二、くつひもしめろ』というのが、アメリカへいくと『愛国殺人』という題名に変わって

います。このようにイギリスとアメリカで題名を変えると例はほかにもあります。

『愛国殺人』

- 1, 2,
Buckle my shoe ;
- 3, 4,
Knock at the door ;
- 5, 6,
Pick up sticks ;
- 7, 8,
Lay them straight ;
- 9, 10,
A big fat hen ;
- 11, 12,
Dig and delve ;
- 13, 14,
Maids a-courting ;
- 15, 16,
Maids in the kitchen ;
- 17, 18,
Maids in waiting ;
- 19, 20,
My plate's empty.

『ヒッコリー・ロードの殺人』

Hickory, dickory, dock,
The mouse ran up the clock
The clock struck one,
The mouse ran down,
Hickory, dickory, dock.

『ヒッコリー・ロードの殺人』

『ヒッコリー・ロードの殺人』、これは名探偵ポアロの出てる作品ですが、イギリスでは *Hickory Dickory Dock* だったのが、*Hickory Dickory Death* とさうように *Dock* の代わりに *Death* がアメリカ版で使ってたかと思えます。時計の「コッチン、コッチン」のあとに「死」という語が入っています。

『白昼の悪魔』（地中海殺人事件）

これもポアロの出てる小説です。『白昼の悪魔』とは、*evil under the sun* というのをそのまま小説の題名としたものです。これも何となくいかにもマザーグースらしい歌です。「あらゆる悪いことには必ずこれを直す方法があるものだ、或いは時にはないかもしれない。もしある場合には探し出して直すようにしなさい。でもないのだったらまあいいではないか、ほっときなさいよ」といった内容の歌で、ある意味では人生に通じたような歌です。もとは *Evil under the Sun* という題名で、ポアロの出てる推理小説ですが、これが映画化されました、日本の題名は『地中海殺人事件』というのだそうです。ずいぶん昔

「白昼の悪魔」
（「地中海殺人事件」）

For every evil under the sun,
There is a remedy or there is none.
If there be one, try and find it ;
If there be none, never mind it.

のもののように、私は見ておりません。この作品では地中海がテーマになっていて、それで『地中海殺人事件』というような名前が付いたのだらうと思います。

「ポケットいっぱいライ麦」

同じくアガサ・クリステイの作品で、ミス・マープルという中年のおばさんが出てくる推理小説がありますが、その一つが『ポケットいっぱいライ麦』で、これは *A Pocket Full of Rye* という原題の短編です。これも元の歌はずいぶん変わった歌でして、最初の部分はこんな歌です。「六ペンスの、歌をうたおう、ポケットは 麦でいっぱい、二四羽のくろつぐみ、パイにやかれて、パイをあけたらうたいだす。」これは昔の中世ではこういうのがご馳走だったらしい。王様の前に出すために本当に作ったそうです。パイの中に鳥を封じ込めてそれを焼くのだそうです。生きたまま。それでそのパイにナイフを入れると、小鳥はさつと一斉に飛び出すという、こういうご馳走があったそうです。そういうことが何で歌になったか。後の続きもなんだか訳の分からない内容です。

「ポケットいっぱいのライ麦」

Sing a song of sixpence,
A pocket full of rye ;
 Four and twenty blackbirds,
 Baked in a pie.

When the pie was opened,
 The birds began to sing ;
 Was not that a dainty dish,
 To set before the king ?

The king was in his counting-house,
 Counting out his money ;
 The queen was in the parlour,
 Eating bread and honey.

The maid was in the garden,
 Hanging out the clothes,
 When down came a blackbird
 And pecked off her nose.

Happy ending ;
 They sent for the king's doctor,
 Who sewed it on again,
 And he sewed it on so neatly,
 The seam was never seen.

している、黒つぐみが飛んできて、鼻をついばんだ」という、馬鹿みたいな歌です。犠牲者のポケットにライ麦が入っていたのですが、そんなことが問題解決の端緒になるのだと思います。だから多少関係があると言えはるわけです。

「王様がお蔵でお金勘定、」昔から政治家連中は金勘定は好きだったらしい。「お后様はお部屋で蜂蜜つきパンをもぐもぐ、」奥様はやっぱりグルメだったようです。「女中さんは庭で干しものを干

「ねずみ取り」

それから一番最後に、「ねずみ取り」という作品があります。これは最初、*Three*

「ねずみ取り」

Three blind mice, see how they run!
They all ran after the farmer's wife,
Who cut off their tails with a carving knife,
Did you ever see such a thing in your life,
As three blind mice?

Blind Mice 「三匹の盲目のネズミ」という題名で一九四七年にラジオドラマにしたものです。まだエリザベス女王が即位する前です。その主題歌がこの歌で、「三匹の盲目のネズミが逃げ回っている、これはおかみさんがしっぽをナイフでちよん切ったのだ、だから逃げ回っているのだ」とあります。このラジオドラマを脚色したのが『ねずみ取り』という作品です。

筋のなかでは一人ずつ犯人が被害者を殺していくわけです。二人までは殺されます。三人目を殺す直前に問題が解決します。これに *The Mousetrap* という題名を付けました。一九五二年の十一月頃、ロンドンで初演したのですが、実は現在もまだやっています。まる四八年です。たまたま知ったのですが、二〇〇〇年の一二月一六日、つまり今日二万回めの上演となる、すなわち上演回数が二万回に達するそうです。イギリス人の推理小説好き芝居好きというのには、少々驚かされます。

おわりに

このようにマザーグースの歌というのは現在まだ生きているということ。それは結

局彼らが自分たちの言葉を大切にしているからではないかと思えます。今言葉が乱れていると言われていますが、私たちとしてはできるだけきちんとした言葉を使いたいものです。それからもう一つ。『ねずみ取り』がこのように二万回も上演されているわけです。日本でも上演されたことがあります。あまり皆さんはいらっしやらないかと思いますが、たまには芝居もご覧になってみてください。この前三月、武田君に教わりまして『遠い花』という三高の先輩を扱った芝居を見に行きました。あのとき比較的年配の方も来ていましたけれども、普通芝居を見に行きますと、大体僕らが見に行くのと恥ずかしいくらい若い人ばかりなのです。ですからまあたまには皆さんも、できるだけ暇を見て芝居でもご覧になれば、多少何か楽しいことがあるかもしれません。

どうも今日はこの程度の話で終わってしまつて申し訳ありません。以上です。ご静聴ありがとうございます。

(明治大学名誉教授)